

第42回
白門祭

開催1か月前の 舞台裏は

総勢70名が半年余かけて入念に準備 企画立案、運営、宣伝に奔走する日々

学生が企画・運営する秋恒例の学園祭は、年間を通じ最大のイベントのひとつ。毎年、大勢の来場者でにぎわうが、その華やかな表舞台を可能にしているのは、舞台裏での人知れぬ苦勞があるからだ。『一祭台祭』をテーマにした2008年度白門祭が、10月31日から11月3日まで多摩キャンパスで（理工白門祭は11月1日〜3日）開かれるのを前に、準備に取り組んできた白門祭実行委員会の舞台裏を取材した。

例年約6万人の来場者

学園祭まであと1か月に迫った10月1日、白門祭実行委員会委員長の滝沢広央さんに話を聞いた。「中大生一人ひとりの力が集まって白門祭はできるんだと思います。みんなの力で最高の白門祭にしたい」と滝沢さんは意気込む。

白門祭実行委員会は総勢70名で、本格的な準備は4月から始まった。4日間の開催期間中に訪れる人は、例年約6万人にも及ぶという。これだけの来場者数を迎えるために、準備を怠らないように会議を重ねながら、企画の立案、運営方法、宣伝活動などを地道に行ってきた。



徹夜での手作り作業も 全学年で週2回の企画会議

1ヶ月前の時点では、最終的に実施する企画を決定し、それに関する製作物を作成する段階に入ったところだった。ゲームに使用するボウリングのルールやピン、クイズボックスなど全てが手作りで、作成するのは1年生。毎日夜遅くまで学校に残り、会室の開放を申請し、徹夜で作業をすることも珍しくない。

企画部が中心となって週2回開く企画会議には、

全学年が集まり、何時間にもわたって話し合いを重ねてきた。

企画の立案とは別に、もうひとつ重要なのは運営に関することだ。サークルやゼミなどの団体が提出する企画書とその説明を書いた「必携本」作成と配布、それに安全対策や学園祭の流れについて説明する企画説明会の運営や、団体の個別の質問にも応じている。各団体が企画を行う場所の抽選会を行う。公平をきすためだ。

新企画はフードコンテスト 来場者参加型の学園祭に

そこで今年の企画について聞くと、滝沢さんは「今年から、フードコンテストを行います。実はこれ、僕が立案したものなんですよ」と嬉しそうに話してくれた。4月の段階でやりたい企画があれば、事務局員全員が企画を提案することができるのだ。

フードコンテストとは、4日間を通して食品を出店する団体全てを対象に、来場者がおいしいと感じた商品に投票をしてもらい、優勝団体には素敵な景品を授与するという催しだ。サークルでの絆は深められても、団体間の繋がりがなかなか得られず、一体感がいまひとつ感じられない学園祭

の欠点を補おう、というのが狙いという。競い合うことで全体の質が上がることにもなる。

一方、来場者参加型の学園祭になり、「自治・文化活動発露の場」、「地域に根ざした白門祭」という学園祭の理念にかなった企画になった。

初めての試みのため、手探り状態だというが、滝沢さんは「今後は、フードコンテストだけでなく、いろんなコンテストをしたら来場者にも楽しんでもらえると思うんですよ」と構想を膨らませる。

今年の目玉は「エコクイズラリー」 1年生が企画し夏休み返上で準備

今年の最大の目玉は、実行委員会主催の「中央大学e3クイズラリー」だ。20名ほどの1年生が主体となって、入学当初から企画を練ってきた。この企画は、多摩キャンパスをめぐるながら「エコクイズラリー」を行うというもので、自然に「エコ」が学べるというのがミソ。

スタンプラリーとクイズとゲームを合わせた企画の立案、具体的なスタンプの設置場所、クイズの内容と細かい部分までも決めるのは全て1年生。夏休み中も大学に集まり企画書作成や、製作物、資料集めに取

り組んだという。

しかし、経験のない1年生の企画だけに、滝沢さんは「少々不安だ」という。このため2泊3日の合宿を行い、先輩たちの意見を聞く機会をもつことにした。

「エコ」については、昨年度からゴミ分別を徹底するためのゴミステーションを設置しているが、今年度からは新たにリサイクル可能なエコ容器も導入するなど、白門祭実行委では今後も力を入れていく考えだ。

取材を終え、記者は今年の白門祭が大成功することを確信した。

(学生記者 新部真子 文学部3年)

